

インクル

NO.3 令和6年10月17日(木)発行



発行 北海道七飯養護学校
七飯町立七飯中学校

残暑もいつの間にか過ぎ去り、やっと本格的な秋を迎えたような今日この頃です。ただ、これからは徐々に気温が下がってきますので、体調管理には十分気を付けていきたいものです。

さて、文部科学省の指定を受けている「インクルーシブな学校運営モデル事業」の取組ですが、第2号では7月と8月に行われた「初任段階研修」と「第1回合同校内研修」の二つの事業について報告しました。今号では9月30日に行われた「第2回連携協議会」の様子について報告いたします。

令和6年度第2回連携協議会

第2回連携協議会は、9月30日(月)の午前10時から七飯養護学校視聴覚室において行われました。出席者は以下の連携協議会の各委員の皆様でした。(敬称略)

氏 名	所 属 等	備 考
與 田 敏 樹	七飯町教育委員会教育長	
北 嶋 公 博	北海道七飯養護学校長	
福 島 由紀子	北海道七飯養護学校副校長	
田 中 昌 行	北海道七飯養護学校教頭	
佐 藤 耕 一	七飯養護学校カリキュラムマネージャー	
細 川 和 成	七飯町立七飯中学校長	
深 山 裕 一	七飯町立七飯中学校教頭	
佐々木 甲 二	七飯中学校特別支援教育コーディネーター	
平 石 聡	北海道七飯高等学校長	
細 谷 一 博	北海道教育大学函館校教授	
山 内 功	学校教育局特別支援教育課長補佐	リモート参加
柏 木 拓 也	道立特別支援教育センター所長	リモート参加
高 石 純	学校教育局特別支援教育課主任指導主事	リモート参加
岡 森 博 宣	道立特別支援教育センター知的障がい教育室長	リモート参加
平 村 祐 輝	学校教育局特別支援教育課主事	リモート参加
寺 田 弘 文	北海道中札内高等養護学校カリキュラムマネージャー	リモート参加

上記の皆様に参加により、会議は以下のように進行了しました。

- ◇ 始めに、第2回連携協議会の開催に当たって、七飯養護学校北嶋校長より挨拶があり、改めて、本モデル事業の取組に対する思いや今後の進め方、事業に対する期待等についてお話しいただきました。

- ◇ 次に、カリキュラムマネージャーより以下の1～3の事項について説明がありました。

1 事前アンケート結果について

インクルーシブな学校運営モデル事業を始めるに当たり、教職員の声を集め、取組の充実を図るために七飯養護学校と七飯中学校の教職員に対するアンケート調査を実施しました。



アンケート項目は16項目（選択式14、記述式2）でした。結果の詳細については割愛しますが、総じて、両校の先生方は本モデル事業の取組に期待していることが分かりました。そうした声に応えるためにも、事業内容の取組の充実を図ることが極めて重要であると感じました。



2 第1回合同校内研修会の報告について

先日発行したインクル通信第2号でお知らせしたように、8月28日に行われた第1回合同校内研修会について協議会委員の皆様へ報告しました。有意義な研修会であったことを委員の皆様にも御理解いただきました。また、研修会に参加した委員の方からも「グループ交流で自らの経験である飛び出しの多い子どもへの対応について話題にしたところ、特性に配慮した指導の仕方などを出していただき、とても勉強になり、意義ある研修会であった。」というお話を頂きました。

3 交流及び共同学習について

今年度の交流及び共同学習の実施予定について、以下のように説明がありました。

(1) 日時及び活動内容

- ・11月26日（火）10:30～11:10

オンラインによる活動：自己紹介や学年・学級の様子を紹介する。

- ・12月3日（火）10:30～11:20

対面による活動：ウオーミングアップの「ともよ」を全員で行い、ボール運びリレー、ボールボウリングを両校生徒がチームになって行う。

- ・12月13日（金）10:30～11:20

対面による活動：上記とほぼ同様の活動を行う。

(2) 対象の生徒

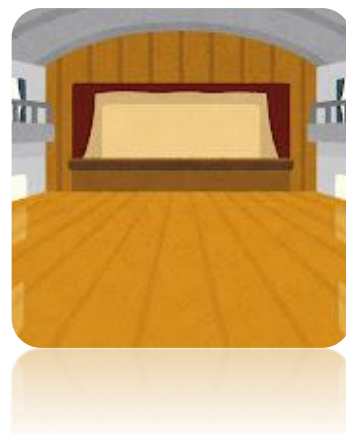
- ・七飯養護学校中学部第1学年13名、七飯中学校第1学年101名

(3) 活動場所

- ・オンライン活動は各学校、対面活動は七飯中学校体育館で行う。
- ・七飯養護学校生徒は町有バスで移動する。

(4) 今後の進め方

- ・両校それぞれにオンライン及び対面での活動についての準備を進める。
- ・事後の活動として、七飯中学校生徒に感想文を書いていただく。
- ・対面活動の様子を動画に撮り、成果発表会等で活用する。



4 その他

- ・今年度の取組の「成果発表会」を実施するが、期日や呼び掛けの範囲等は検討中である。
- ・第2回の合同研修は一堂に会さず、Googleのアプリ等を活用した事例研修を検討している。
- ・第3回連携協議会は令和7年2月18日（火）の午後に行う。

最後に、七飯中学校細川校長より「当初、本事業に協力することに不安があったが、先生方の事業に対する前向きな姿勢から、手応えのある学びになるのではないかと確信している。一緒に頑張っていきたい。」との挨拶で閉会しました。

＜協議における質問、意見、助言等の要旨＞

- ・七飯養護学校のアンケートの回答率が7割で、3割が回答していないのはなぜか。もし、この3割が回答していたら、アンケート結果は反対の方向に寄って行くのか。
- ・校長から回答数を職員に投げ掛け、当初より回答率は増えたが、結果として、残り3割の教職員は回答を出せなかった。特に、反対するという意図で回答しなかったわけではないと理解している。
- ・交流及び共同学習は交流をメインにすると、従前からある交流と同様になるのではないかと。あくまで交流及び共同学習でなければ、今後も普通の交流になっていく。一貫して交流及び共同学習としてお互いの学びになるように行っていく方がよい。感想文もただ書くのではなく、何を学んだかを振り返る活動にすべきであり、それが教科の評価にならないといけない。

- ・対面での活動の際、両校の人数差を解消するための役割分担として、司会、得点、新聞係（写真、取材、表現等）を工夫していきたい。
- ・役割分担は目的意識をもたせながら、実際の活動の割り振りをしていくこと等が考えられる。
- ・対面での活動では5～10分程度の動画を作成し、成果発表会や参観日等で活用することも有効である。動画編集に堪能な職員がいれば、七飯中学校にもお手伝いをお願いしたい。
- ・生徒は動画編集ができ、1年生はスライドショーも作成できる。他の単元との関係もあるので、時数確保や生徒の負担にならない程度で協力できると思う。
- ・本モデル事業は、中学校と特別支援学校が一体的に取り組むことがポイントである。教職員の研修の方が垣根が低いことが今回の実践で分かった。今後は、研修して学び合った教員同士がお互いの学校に出向く等、個別に動き出し、それを管理職が認めることも一体的学校運営ということになる。生徒同士の交流も10数人对100人という組織的なものから、個別化していくことがポイントになる。七飯中学校の生徒が七飯養護学校と個別に関わるニーズや七飯養護学校の生徒が七飯中学校と個別に関わるニーズがあったとき、それを認める学級担任、管理職、教育委員会であることが肝になってくる。全体と個別で子どもの成長を捉え評価していくことが大事である。
- ・交流における配慮については、やってみての配慮であって、交流してから配慮する内容を考えていくこともこの事業としては大事になる。
- ・全体の垣根を下げることから、互いに行き来することにつなげていくことの重要性は理解できる。教員は互いに授業参観等で行き来しているが、生徒はまだその段階にないので、今後、検討していきたい。また、七飯養護学校の生徒が集団の中に入ることへの不安から、いろいろな配慮を考えているが、実施してみると必要のない配慮があるかもしれないし、もっと必要な配慮があるということに気付くこともあると思う。いずれにしても、事業を進めるに当たっては、折々で様々な方から御意見を伺うことの必要性を改めて感じている。
- ・今回の交流及び共同学習のように総合や道徳で行う場合、その教科の目標を達成したかどうかを評価する必要がある。教科の学習が積み重なってきたときに、交流及び共同学習のねらいが達成していくことになると思った方がよい。1～3回程度一緒に活動したところで、交流及び共同学習のねらいは達成できない。この学習活動をずっと続けて行ったとき、両校の生徒が互いを認め合える気持ちが育った大人になることが交流及び共同学習のねらいが達成されたことになる。そのためにも道徳や総合の学習として蓄積されていくことが大事になる。
- ・集団に入ることが苦手な七飯養護学校の生徒にどのような手立てが必要かを考えることが七飯養護学校の教師の役割であり、七飯中学校は集団に入ることが難しい生徒をどう受け入れ、どう場を共有できるかを考えることが必要となる。このことが特別支援教育の視点であり、その視点を持って教育することが大事になる。そして、それが積み重なっていき、先生方が連携したときに、インクルーシブ教育のシステムができ上がることになる。
- ・合同研修会では七飯養護学校と七飯中学校の先生方が本音で議論している様子が見られた。本音で語り合えることが大事なことである。
- ・「小さな親切運動函館本部」から七飯町に車いすの贈呈があり、そのときの挨拶で、準備して行うボランティアはできるけど、突然出会う場面で行う小さな親切はできるかどうか分からないという話をした。ただ、突然やってくる小さな親切でも顔見知りであればできる。このことから、この事業を通して子どもたち同士が知り合いになれば、その子が町で困っているときも親切ができるようになる。



その一助になれば本事業は素晴らしいものとなる。さらに、この事業を通して両校の子どもたちが、大人に褒められてうれしいから、自分自身が心から楽しいに変わっていき、「楽しかった」で終わってほしい。そうなれば、このモデル事業は素晴らしい事業であるということになる。

（文責：佐藤耕一カリキュラム・マネージャー）